水稲を初冬直播き

矢巾町の阿部さん（盛岡農高1年）後継者への取り組み

盛岡農業高植物科学科1年の阿部倫太郎さん（16）は、自宅がある矢巾町間野々のほ場で、初冬にまいた種もみを雪の下で越冬させる水稲の新技術「初冬直播き（じかまき）」に挑戦する。数年後に農業後継者となることを見据え、春に集中する農作業の分散化と省力化を図ろうと導入。「将来は独自の栽培方法を確立し、自分のブランドとして米を出荷できるようになりたい」と将来を描く。

来秋の収穫を目指した播種（はしゅ）の作業が15日にあり、みちのくクボタ（本社・花巻市）の担い手推進部企画チームの藤原辰徳さん（35）らが播種機を貸し出して実演。阿部さんの父の修一さん（45）が管理する約30㌃の乾田に、阿部さんが鳥害防止・消毒効果がある薬剤をコーティングしたひとめぼれの種子50㌔をまいた。

出芽に効果があるとされる地表から約2㌢の深さに種が収まるよう、機械を調整しながら施肥、播種、さらには土をかけて鎮圧するまでを同時に行い、阿部さんも熱心に見学した。

同技術は、春の苗の移植に代わる技術として、岩手大農学部の下野裕之教授らが全国の研究機関・生産者と共同で実用化を目指し、10月からマニュアルにまとめて公開している。

阿部さんは、日本農業新聞で同技術を知り、盛岡農高に来校した同大農学部教授に質問した際に農業機械を扱うみちのくクボタを紹介してもらった。阿部さんの相談を受けた同社が、将来の農業の担い手を支援しようと播種に協力した。

阿部さん宅は代々農業を営み、祖父の直三さん（72）の代で作付面積を広げ、現在は野菜を中心に栽培している。水稲では主に「銀河のしずく」を栽培しているが、レタスの収穫期と田植えの時期が重なることやイネの育苗にはビニールハウスのスペースが必要になることなど、「イネを増やせば負担が増える」（修一さん）状況だったという。

子どものころから祖母や父の姿を見て農業を志し、農作物を「おいしい」といってもらえることに農業の魅力を感じるという阿部さん。「春の農作業の負担が減らせるのは大きな魅力」と意欲を燃やす。父の修一さんも「地域でも高齢化が進む中、新しい農業を自分で考えながら取り組んでくれるのはうれしい」と見守る。

みちのくクボタ社員らの協力で初めての初冬直播きに取り組む阿部倫太郎さん

※盛岡タイムス　令和5年11月16日付
盛岡タイムス社の許諾を得て掲載しています
※無断転載・複写を禁じます